

日月潭～景勝地と電力開発史、そして原住民族



片倉 佳史（台湾在住作家）

台湾中部に位置する日月潭は、緑深い山間に位置する湖である。台湾を代表する景勝地に挙げられ、レイクリゾートとして整備されている。同時に、台湾唯一の「湖」とも言える存在である。今回はこの日月潭の歴史をたどってみよう。

台湾中部に位置する景勝地

日月潭（じつげつたん）は台湾中部・南投県にある湖で、美しい眺めで知られている。台湾を代表する景勝地であり、現在は台湾政府交通部に属する日月潭国家風景区管理處の管轄下にある。

日月潭の湖面は満水時で海拔 748.5 メートルの高さにあり、周囲は約 33 キロ。水深は 27 メートルほどである。面積は満水時でも 8.3 平方キロと大きくはないが、台湾にはもともと湖沼が少ないため、唯一の湖と言ってもいい。

この湖には小さな島があり、サオ族の言葉で「ラル」と称されていた。この島は日本統治時代は「玉島」、戦後は「光華島」と呼ばれたが、現在は「ラルー（拉魯島と表記）」に戻されている。後述するが、この小島は付近一帯に暮らすサオ族の人々が祖霊の集う島として崇めてきた場所である。

なお、「日月潭」を日本語でどのように読むのが



湖岸にはリゾートホテルが並び、多くの行楽客が訪れる。中国からの旅行者の人気の高い場所でもある。

適切かということも触れておきたい。終戦まで、この湖の名は、「じつげつたん」であった。現在は旅行者を中心に「にちげつたん」と呼ぶことが増え、ガイドブックなどでもこのように記されることが多いが、本稿では史実に従って、「じつげつたん」としたいと思う。

独特な色合いに変わる神秘の湖

日月潭は紫がかった独特な色合いで知られている。この一帯は老年期地形であり、湖底には厚さ 5 メートルに達する腐泥が沈殿している。そのため、無数の微生物が発生し、湖水が暗緑色となる。暗く沈んだ印象の色合いだが、ここに日光が差し込むと、緑がかった美しい色に変化する。

特に朝霧に煙る様子は日月潭のハイライトとも言うべきもので、息をのむような美しさだ。日月潭を訪れる際には、ぜひとも一泊し、早朝だけに見られる絶景を愛でてみたいものである。

かつて、この付近にはいくつかの湖沼があった



美しい色合いで知られる日月潭。台湾中部最大の景勝地となっている。

とされる。頭社（とうしゃ）、魚池（ぎょち）、埔里（ほり）などだが、これらは、いずれも断層によってできた湖沼の跡地で、湖沼そのものは干上がって消滅し、そこに現在の集落ができていのである。

その中で、唯一の例外とも言えるのが日月潭である。その理由は日本統治時代に水力発電所の建設工事が行なわれたためである。台湾総督府は、日月潭に約 15 キロの導水管を設けて濁水溪の水を引き込み、ここを人造湖とした。つまり、日月潭は水力発電用の貯水池として利用されることで、湖として残ったのである。

当然ながら、本来の日月潭は今より小さく、後述する拉魯（ラル）島は現在よりも大きかった。工事を経て、もともとは 4.5 平方キロ程度だった面積が約 1.8 倍になった。そして、湖面は海拔 726.8 メートルから 748 メートルに上昇した。

現在、水里（すいり）からバスに揺られ、日月潭の姿が見えてからしばらくすると、200 メートルほど直線が続く区間がある。ここは湖水の流出を遮るための堰堤で、一見したかぎりでは普通の道路のように思えるが、片側は高さ 30 メートルの壁となっている。少し離れて眺めてみると、堰堤であることがわかる。脇には工事の際に殉職した工員たちの慰霊碑が残っている。



日月潭の湖底には厚い沈積物の層があり、日光が差し込むと、湖水の色合いが変化する。

1999 年 9 月 21 日の台湾中部大震災では、日月潭一帯も大きな被害を受けた。幾棟もの大型建築物が倒壊し、道路は寸断された。拉魯島も地殻変動で水没しかかったが、堰堤をはじめ、付近に設けられたいくつかの発電施設の被害はいずれも小さかった。マグニチュード 7.6 という震災にも耐え、震災を意識して構築された日本統治時代の建築技術が注目を集めた。

東洋最大規模の発電所

台湾における電力事業の歴史をたどってみよう。1897（明治 30）年、台北電灯株式会社が設立されたことが端緒となり、台湾における電力事業の歴史は始まった。本格的な電力供給は 1905（明治 38）年に始まった。最初の発電所は台北郊外の亀山という場所に設けられ、使用できたのは台北市街の 569 戸だった。

その後、各地で発電所をはじめとする施設の建設が進められた。南部においては、本連載でも紹介した高雄郊外の美濃にある竹子門水力発電所がその嚆矢となった。ただし、当時は大規模な発電所はまだなく、大正期に入ってから設けられるようになった。

日本統治時代中期まで、台湾は「帝国南方の農業基地」という位置づけで、食糧供給地という認識が強かった。しかし、大正時代に入った頃から各種産業が順調に発展し、経済成長も進んできたことから、電力の需要は大幅に伸びていった。具体的には 1918（大正 7）年には契約量だけで 1 万キロワットに達している。

こうした中、官民共同の会社が設立されることとなった。この会社が「台湾電力株式会社」である。設立は 1919（大正 8）年 7 月 31 日。初代社長には松木幹一郎が就いた。

この会社は半官半民であり、落差 320 メートル、発電量 10 万キロワットという水力発電所を日月潭に設け、台湾全土に電力を供給すると銘打ってい

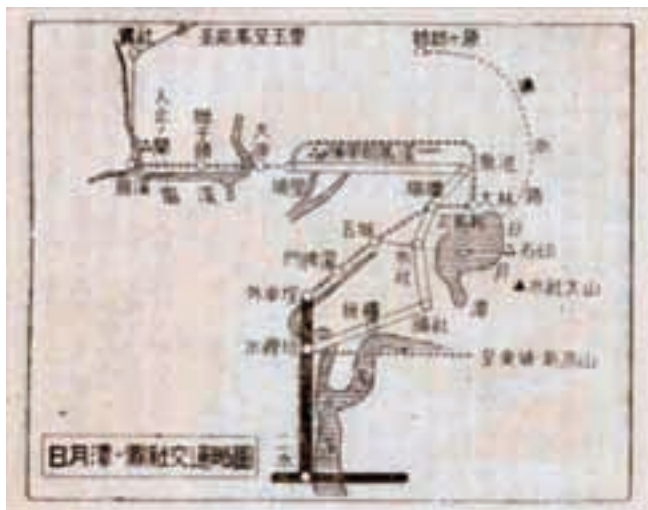
た。資本金は3,000万円で、1,200万円を総督府が出し、残りの1,800万円は民間からの出資だった。

しかし、1927（昭和2）年、第一次世界大戦後の経済恐慌のあおりを受け、日本本土の財政不況が深刻化し、資金調達の見途が立たなくなりました。予算を使い切った時点で工事は中断され、計画そのものが頓挫してしまいました。

それでも、より多くの電力が必要になっていくのは明らかで、特に新興の高雄市を産業都市として発展させるためには、電力の安定供給は不可欠だった。幸い、1929（昭和4）年に政府による資金援助が帝国議会で約束され、翌々年には米国モルガン財団からの借款が成立、工事は再開された。

1934（昭和9）年、工事は完了し、日月潭第一発電所が完成する。この発電所は発電能力が最大10万キロワット、平均5万5千キロワットという東洋最大規模のものだった。1937（昭和12）年には、当時は「水裡坑（すいりこう）」と呼ばれていた水里に日月潭第二発電所も完成した。

ここで得られた電力は、送電線によって主に高雄方面に送られていった。これは高雄のみならず、工業化の黎明期にあった台湾の産業界に大きな貢献をもたらした。なお、送電線の総延長は362キロにおよんでいた。



日月潭の名が知られたのは水力発電所の存在が大きい。発電所は門牌潭に設けられていた。日本統治時代に発行された『鉄道旅行案内』より。



堰堤の完成後は道路が設けられた。現在、湖岸にはサイクリングロードなども整備されている。



堰堤の傍らに殉戦者の慰霊碑が残る。1944（昭和19）年12月に鉄道工業株式会社が建碑したものの。

拉魯島～歴史に翻弄されたサオ族の聖地

清国統治時代、日月潭は「水社大湖」、「水社海」などと呼ばれていた。日月潭の呼称は清国統治時代、湖の南側が日輪型、北東側が三日月型をしていることにちなんで命名され、日本統治時代に入った後も、その名は受け継がれた。

湖に浮かぶ島「ラル」（漢字では拉魯島と表記）は、日月潭のシンボルである。小さな島だが、ここはサオ（邵）族の祖霊が集う聖地であり、神聖視されてきた。ここは清国統治時代、「珠子嶼」と呼ばれ、日本統治時代はこれを意識して、「玉島（たましま）」の呼称が生まれた。同時に、「中の島」という呼称もあり、神社が設けられてからは、この名がよく用いられたようである。

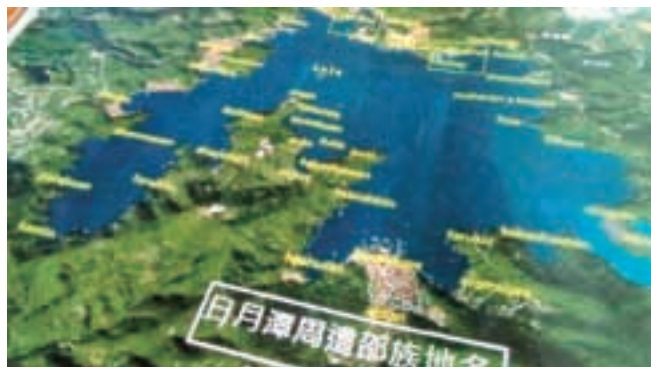
日本統治時代の神社は「玉島神社」と呼ばれ、祭神には広島県の巖島（いつくしま）神社と同様、

水神である市杵島姫命（いちきしまひめ）を祀っていた。鎮座式は1931（昭和6）年11月24日に挙行されている。

現在もこの神社の遺構は残っており、石段の一部を確認できる。また、湖岸にある龍鳳宮という廟の敷地内に設けられた集会所には神社時代の狛犬が残されている。

戦後の中華民国・国民党政権時代を迎えると、ここは「光華島」と呼ばれるようになった。「光華」とは「光復中華」という言葉を省略化したもので、「光復」は外国勢力によって奪われた光を取り戻すという意味で、中華民国・国民党政府が多用してきた言葉である。

1999年9月21日、台湾中部を大地震が襲った。この時にも大きな被害が出ている。いわゆる震災



日月潭はサオ族の言葉では「レントウン」と呼ばれる。サオ族はイタサオと呼ばれる集落に暮らしている。サオ語の地図。



1999年9月21日の台湾中部大震災では大きな被害が出た。現在、島への上陸は禁止されているが、浮き筏の上から眺められる。

のみならず、地殻変動が起こったことで、拉魯島はさらに小さくなってしまった。現在はわずかに頂部が残るだけとなっており、上陸は禁止されている。

拉魯島を訪れる際は遊覧船を利用することになる。島の周囲には固定された大きな筏が浮かんでおり、その上から島の様子を眺めることができる。

知られざる三蔵法師の霊骨

また、日月潭の湖畔にある玄奘寺（げんじょうじ）にも、ぜひ立ち寄ってみたい。ここは1965年に開かれた寺院で、西遊記で知られる玄奘三蔵（三蔵法師）の霊骨が安置されている。

その経緯は興味深い。戦時下の1942（昭和17）年12月、日本軍は南京に進駐し、ある兵廠の敷地に稲荷神社を造営しようとした。この時、偶然、三蔵法師の霊骨が発見され、大騒ぎとなった。そして、南京政府と話し合いの結果、一部が日本に運び込まれることとなった。

霊骨は埼玉県岩槻市（現・さいたま市）の慈恩寺や奈良県の薬師寺に移され、安置されていたが、1956年5月27日、当時、国交のあった「中華民国」へ返還されることとなり、台湾へと渡ってきた。国民党政府は受け入れに際し、この寺院を設け、現在に至っている。

なお、本堂は1999年9月の台湾中部大震災で大きな被害を受けたが、現在は修復され、参観が可能となっている。

サオ族（邵族）の人々

日月潭付近には台湾原住民族のサオ族が暮らしている。現在の人口は794名（台湾政府原住民族委員会・2018年11月）。サオ族の人口は長らく300名未満とされていたが、認定基準が改められて数が増えた。

サオ族はツォウ族の支族として分類されるが多かった。本来は全く異なった文化を持ち、意



サオ語の継承者として知られた石阿松氏。2017年2月7日、多くの人に惜しまれつつ、世を去った。享年95歳だった。

識の上でも関連性はないが、これが通説とされていた。歴史的には他部族との接触は少なく、近隣に暮らすブヌン族や、発祥伝説に関連性が推測されるツォウ族とも血統的な繋がり確認されていない。ただし、現在はブヌン族との通婚が増えており、ブヌン文化の混入が見られる。

一方で、サオ族は漢人系住民との接触は他部族よりも早く、その文化を受容してきた。漢人の生活習慣が入り込み、特に言語については、現在、若い世代では中国語（台湾華語・北京語）、中高年世代ではホーロー語（台湾語）が用いられ、サオ語はサオ族の者同士が会話をする際、わずかに出てくる程度になってしまった。現在、サオ語を常用しているのは高齢者に限られ、その数も多くない。2017年2月、サオ語の継承に努めていた長老・石阿松氏が他界し、サオ語はこれまでにない危機に直面している。

なお、「サオ (= Thao)」とは、「人」を意味する言葉であり、自称に用いることもある。漢人文

化の影響を強く受けていたため、清国統治時代から「化蕃」と称され、日本統治時代もこの呼称は受け継がれていた。

サオ族の人々が歩んできた歴史

日月潭周辺は古くは「水沙連」と呼ばれ、サオ族の人々がこの土地を所有していた。後述するように、19世紀に台中方面からパゼツへ族の移入が始まると、サオ族は埔里盆地一帯を人々に貸し、地租として穀類を得た。

その一方、清国統治時代は官憲との衝突が絶えなかった。清国は1787年に勃発した林爽文の乱を平定した後、屯田制を敷いて、サオ族の人々を体制に取り込んでいた。しかし、当時から漢人系住民による移入は留まることがなく、1814年には「郭百年事件」と呼ばれるサオ族と漢人系住民の大規模な衝突が発生した。

この事件の後、漢人系住民との混住が始まり、徐々に漢人の文化がこの地にも入り込んでいった。サオ族は元来、アワを主食としていたが、徐々に水田耕作を行なうようになり、これを糧とするようになった。拉魯島にも1876年に、サオ族とは何らゆかりのない儒学信仰の拠点「正心書院」が設けられた。

先に述べた水力発電所の建設工事でも、人々は大きな影響を受けた。工事に伴って水没した地域に暮らす人々は移住を強いられ、点在していたサオ族の集落は一か所に集められた。これが徳化社（伊達邵・イタサオ）である。

また、日月潭の拡張によって奪われた土地に関する利権も、台湾総督府は保証をしなかった。そして、戦時期に入り、皇民化運動が活発化すると、サオ族の社会も「日本化」を強いられた。祖霊が集う拉魯（ラル）島には神社が設けられた。

日本統治時代、日月潭は景勝地として盛んに宣伝されていた。特に脱穀時に唄われるという杵歌は、長さの異なる杵でリズムをとる独特な旋律で



日本統治時代には市杵島姫命（いちきしまひめ）を奉祀する神社が設けられていた。鎮座は1931（昭和6）年11月24日。玉島社と呼ばれていた。日本統治時代に発行された絵葉書。『古写真が語る台湾 日本統治時代の50年』より。

知られた。サオ族の暮らしぶりも絵葉書などで紹介されていた。

この時期は漢人系住民の移入に制限が設けられていたが、戦後、新しい統治者として中華民国が台湾に君臨すると、状況は変わった。換金性の高い商品作物の栽培が盛んになり、メンマの材料となる麻竹（まちく）やビンロウ、マコモダケといった農作物の栽培を目的に、漢人系住民の人口が急増した。

観光地としての日月潭は多くの人々に親しまれているが、そういった業種を切り盛りするのは圧倒的に漢人系住民であり、サオ族の人々はそのビジネスモデルに労働者として組み込まれているのに過ぎない。原住民族文化の独自性や異国情緒は昨今の台湾では多くの人々の注目を集めており、行政もこういった「資源」に目を付け、資金の投入を惜しまない。しかし、彼らは往々にして観光の「素材」として注目しているだけであり、それ以上の熱意はない。

今や、観光化の波はイタサオ全体を呑み込んでいる。

受け継がれゆく伝統文化

サオ族は一夫一婦制の父兄社会となっており、基本的には妻は夫の家に入り、夫の両親と暮らす。

姓は大きく7つ、袁、石、毛、陳、高、白、丹（朱とも）があり、これらはサオ語の姓を漢字に意識、もしくは音訳したものだが、現在、サオ語の姓はほとんど用いられていない。ただし、同じ氏族間の通婚は許されず、これは今も貫かれているという。

部族・集落の決定事項は長老を中心とした会議で決められ、合議制である。基本的には男性中心の社会となっているが、儀礼については、先祖の言葉を伝える「シンシー」、もしくは「シンセーマ」（漢字では「神生媽」、「先生媽」と表記）と呼ばれる女性巫師が重要な役割を担っている。この女性巫師は7名おり、年中行事や祭典、冠婚葬祭、招魂、新しい家屋や船の建設、家畜の売買などについての祈祷を行ない、かつては病の治癒や占い、通霊なども行なっていた。

シンシー（シンセーマ）には長い祭文があり、吟唱は20～30分かかる。これは古語であるため、意味が分からないということも多いという。しかし、暗記は必須であり、儀礼によっても内容は異なる。また、先祖に対し、家内事情を報告する義務があり、これは祈祷を兼ねているので、欠かすことは許されない。なお、祭文をあげる際は熟慮していることを伝えるべく、右手を顎に添えながら行なう。

その際に「祖霊籃」という籠を先祖の存在に重



サオ族の老婆たち。ここ数年、サオ族は固有文化の復興を熱心に進めており、サオ族の文化を紹介する書籍の編纂なども進んでいる。



杵歌（マスバビアン）。白と長さの異なる杵でリズムをとる合奏。多い時は10名程度のサオ族女性が奏でる。『日本地理大系』より。



イタサオの集落は観光客で賑わう埤頭付近ではなく、坂道を上った先にある。これは1999年の台湾中部大震災後に設けられた住宅区である。

ねる。これは各氏族がそれぞれ持つ祭具で、サオ族の信仰の中で最も大切なものとされている。人々は「祖霊籃」に至上の価値を認め、崇めてきた。少数派ながらも、圧倒的な力でのしかかる漢人文化に併呑されることなく、文化的独自性を保ってきたサオ族だが、彼らにとって、これがいかに重要な意味をもっているかは想像に難くない。

サオ族の伝説～妊婦とフクロウ

やや余談ながら、伝承を一つ、紹介したい。サオ族の人々はフクロウに親しみを抱いている。その姿を見かけても、決して殺すようなことはなく、一種の聖鳥に近い存在である。狩猟の際には獲物

がいる場所を教えてくれたり、危険な方角を人々に指示してくれたりするという言い伝えもある。

以下は筆者が2003年にサオ族の老人たちから聞いた話である。

その昔、とても美しい少女がいた。少女は未婚だったが、ある日、突然、お腹が大きくなり、妊娠したことが知られてしまった。人々はこれをとっても恥ずかしいことだと罵り、少女を責め続けた。そして、少女は耐えきれず、ある夜、山の中に逃げてしまった。

数日して、入れ違いに山に入っていた猟師が山中でその少女とすれ違ったと語った。人々がその行方を尋ねると、猟師は悲しそうに、その少女はもう村には戻ってこないだろうと話した。

少女は誰も自分の話を聞いてくれなかった集落を離れ、自らの不幸話をやさしく聞いてくれた山中のフクロウに心を許し、これから自分はフクロウになることを決心したというのだ。

人々は当初、この話を信じなかったが、数日後、大きなフクロウが集落に飛んできた。この時はすぐに山へ戻っていったが、その後、サオ族の女性が妊娠をすると、必ずフクロウが妊婦の家に飛んで来くるようになり、大きな声で鳴き続けるようになった。まるで、「この家には妊婦がいる」と、



お土産屋で売られているフクロウのマスコット。サオ族の人々にとって、フクロウは特別な存在であるという。



日本統治時代の魚池郵便局に置かれていた風景印。サオ族の杵歌の様子が描かれている。『台湾風景印～駅スタンプと風景印の旅』より。

人々に伝えているかのようなようだった。それは、どんなことがあっても、妊婦をいたわり、大切にしてほしいという少女の願いだった。

これ以来、サオ族の人々はフクロウが少女の化身だと信じるようになったという。そして、妊婦は集落の人々みんなでいたわること、フクロウは絶対に殺してはいけないことを子孫に言い伝えるようになったという。

こういった伝承・伝説の類は、話者の高齢化に伴い、年々、調査や取材が難しくなっている。

埔里盆地に移住した平埔族

台湾に漢人系住民がやって来るよりも前、台湾西部には平埔族（へいほぞく）と呼ばれる人々が暮らしていた。彼らはいわゆる平地に暮らす原住民族で、平埔族とはいくつかの部族に分かれる彼らの総称である。多くの場合、農耕と採集を糧とし、集団生活を営んでいたとされる。また、比較的早期から漢人文化の影響を受け、日本統治時代に入った頃には部族固有の文化を失っていることが多かった。

日本統治時代は彼らの文化についての研究も進められ、数々の研究記録が編まれた。しかし、漢人化の進行は止まることなく、昭和期に入って以

降は「日本化」も進んだ。特に言語については急速に失われ、都市部においてはほとんど消滅に近い状態となってしまった。

戦後は中華民国政府による政策上、台湾の土着文化はどれも発展を憚られた。平埔族についても例外ではなく、民主化が進められた1990年代後半を迎えてから、部族文化を再興させる試みが起こるようになった。こういった流れは年々活発になっており、研究者も徐々に育ちつつある。

カハブ族の文化に触れる

カハブ族は漢字では「噶哈巫」族と表記される。私は数年前に苗栗県で行なわれたサイシャット族の祭典でカハブ族の青年 Bauke さんと知り合い、彼らの部族文化に縁を得た。

カハブ族は埔里盆地の南部に暮らし、独自の言語をもつ。本来、台湾中部の沿岸部に暮らしていたパゼツヘ族（漢字では「巴宰族」と表記）の支族とされることが多く、言語もパゼツヘ族のものに近いとされる。日本統治時代に調査を実施した伊能嘉矩（いのうかのり）は両者を同一部族と見なしている。

もともと、カハブ族は台中近郊の豊原や后里に暮らしていた。その後、中国大陸から渡ってきた漢人系住民の圧迫を受け、1823年頃に集団で埔里盆地に遷移した。しかし、漢人系住民は埔里盆地にも移入を続け、平埔族の各部族は同化されていくことになる。

日本統治時代、カハブ族の人々は埔里盆地において、大きく4つの集落に分かれて暮らしていた。そのため、「眉溪四庄蕃（びけいししょうばん）」という呼称で呼ばれていた。牛眠山（現・牛眠）、守城份（現・守城）、大湳（現・大南）、蜈蚣崙の四集落のほか、隣接する仁愛郷（郷は日本の「村」に相当）にもわずかながら、カハブ族の血統を引く人々が暮らしている。

現在、人々は旧暦11月に部族の伝統行事とし

て新年を祝う。この時には、「マアザズア」と呼ばれるリレーを行ない、これが成人への儀礼としても機能している。

現時点では、台湾政府はカハブ族を独立した一部族として認めていない。しかし、人々は自らの文化について調査を進め、探究を続けている。伝統行事や祭典、そして言語や伝承などについても記録が取られ、失われつつあった部族の伝統を取り戻すことに熱心だ。具体的には、地元有志で集まり、部族語を老人たちから学んだり、伝統的な楽曲を記録したりすることで、部族文化を再興させようとしている。

強大な勢力を誇る漢人文化を前に、原住民族が自らの伝統文化を守り続けるのは大きな困難を伴

う。さらに時代の変化に伴う世代交代というものもあり、守り抜く方策も重要だ。実際に、埔里盆地に移住した平埔族の各部族は同化が進み、漢人文化に併呑されていった。

そんな中、本稿で取り上げたサオ族やカハブ族がどのような展開を見せていくのか、今後の動きを注視したいところである。

(参考文献)

「台湾サオ族の儀礼的世界と認同の求心性」(山路勝彦、1996)
 「人関係の言葉からみえてくるサオ族の社会」(新居田純野、2011)

『台湾蕃人事情』(伊能嘉矩・粟野伝之丞、1900)



母語であるカハブ語を積極的に話そうと記された自動車。埔里の市街地にて。



カハブ族の伝承の中に「サーモ」と呼ばれる魔女伝説がある。バナナの葉を用いて空を飛ぶと言われ、カハブ文化協会が制作したオリジナルTシャツにもその姿が描かれていた。

片倉佳史 (かたくら よしふみ)

1969年生まれ。早稲田大学教育学部教育学科卒業。台湾に残る日本統治時代の遺構を探し歩き、記録している。地理・歴史、原住民族の風俗・文化、グルメなどのジャンルで執筆と撮影を続けるほか、台湾の社会事情や旅行情報などをテーマに講演活動を行なっている。また、これまでに手がけた台湾のガイドブックはのべ35冊を数える。著書に『台湾に生きている日本』(祥伝社)、『古写真が語る台湾 日本統治時代の50年』(祥伝社)、『旅の指さし会話帳・台湾』(情報センター出版局)、『台湾に残る日本鉄道遺産』(交通新聞社)など。2012年には李登輝元総統の著作『日台の「心と心の絆」～素晴らしき日本人へ』(宝島社)を手がけるほか、台北生活情報誌『悠遊台湾』を毎年刊行。最新刊は『台湾探見 Discover Taiwan～ちょっぴりディープに台湾体験』(片倉真理著・ウェッジ)。『台北・歴史建築探訪～歩いて訪ねる！永久保存版・台北歴史建築ガイド』(ウェッジ)を近刊予定。

ウェブサイト台湾特捜百貨店 <http://katakura.net/>